

秋葉街道案内資料 Ⅱ

「鹿島から光明山・秋葉山へ」



○ 秋葉山と秋葉信仰

現在、秋葉山には、山頂近くに「秋葉山本宮秋葉神社」の上社があり、山頂より少し下った杉平に「曹洞宗秋葉山秋葉寺」があって、信仰の山としてその両輪を形作っている。それぞれ発行している縁起には、明治の初めに至る解釈に異なるところがある。

秋葉寺は、「秋葉寺略縁起」によると、行基が秋葉山山頂に聖観世音菩薩を本尊とする大登山霊雲院を創建し、その後三尺坊大権現の出現により「秋葉山秋葉寺」と改められたという。「秋葉山略縁起」（寛政3年の写し）では、「大登山秋葉寺」となっている。

平安時代から鎌倉時代を通じて発達した修験道の霊場の一つとして、三尺坊により秋葉修験の基礎が据えられ、守護神となったことにより三尺坊の霊験への信仰が高まったと推定される。

江戸時代中期以降、三尺坊大権現の火防の神としての信仰が急速に広まり、講の組織が全国的に作られるようになった。そして、お札を受けるために秋葉道者となって代参をした。また村の辻には秋葉山常夜灯やその鞘堂（龍燈）が建てられるようになった。

明治時代になり、神仏分離政策により秋葉寺は廃寺となり、諸仏や仏具は一時、本寺である可睡斎（袋井市）に移された。その後可睡斎には秋葉総本殿に三尺坊大権現（本体）が祀られ、また明治13年に秋葉山秋葉寺が現在地に再興されて三尺坊大権現（分体）が祀られ、それぞれ信仰されている。

秋葉神社は、縁起によると、秋葉山には往古「火之迦具土大神」を祭神とする「岐陞保神社」があり、中世には秋葉大権現と称していたが、明治の神仏分離により、「秋葉神社」と称するようになったという。さらに昭和27年「秋葉山本宮秋葉神社」と改称され、火防開運の神として信仰されている。

○ 秋葉街道

秋葉街道は、江戸時代は「秋葉道」と呼び、幾筋もの道がある。特に代表的なものとして、関東方面からは、東海道を西に向かい、掛川宿から分岐して森、三倉、犬居を経て秋葉山をめざす。関西からは、東海道を東に向かい、浜松宿から鹿島を経て秋葉山に向かった。また、御油から姫街道を東に向かう道筋などもあった。浜松から秋葉山までの里程は、江戸時代後期の「秋葉山参詣道法図」では「九里余」である。

そして、秋葉を火の神、光明を水の神として、両方へ参拝してこそ霊験があるという信仰が生まれ、途中で光明山へ詣ってから、峯小屋・長沢・和田之谷を経て秋葉山へ至る旅人も多かった。

本資料は、鹿島から光明山、そして秋葉山への道筋を案内する。



「秋葉山参詣道法図」より

○ 秋葉街道の道筋の復元について

本資料の秋葉街道の道筋は、江戸時代の道に最も近いと思われる大日本帝国陸地測量部が明治23年に測量した二万分の一の地図をもとにし、地元の人の話も聞き、現在の地図上に復元した。現在の地図は、国土地理院の「電子国土ポータル」を活用した。不正確な部分があると思われるが、今後修正をしたい。

○ 参考文献

静岡県歴史の道 秋葉街道	静岡県教育委員会
天竜川と秋葉街道	神谷昌志
ふるさと歴史ガイドブック	二俣・光明編 天竜市役所
ふるりの道しるべ	塩崎俊雄
ふるさとものがたり	上阿多古草ぶえ会
壬生の里 10・11号	天竜市地方史研究会報
田代家物語と二俣城	鹿島の里交流振興事業実行委員会
信仰の道 秋葉街道	田中元二
秋葉山三尺坊大権現	野崎正幸
遠山奇談	華誘居士
掛川誌稿	斎田茂先
遠江国風土記伝	内山真龍
浜松の古墳めぐり	浜松市

作成 平成23年6月15日 改訂 平成25年5月1日
浜松市浜北区寺島816 太田隆雄 TEL 053-587-3063



天竜川を渡り、鳥羽山峠を越える難所と言われるこの地域では、江戸から昭和の時代に至る交通の変遷を見ることができる。

江戸時代の秋葉街道は、渡船場から鳥羽山方面に向かい、椎ヶ脇神社の御旅所前から田代家の裏の山を登り、峠を越えて二俣へ下る道筋であった。

明治時代の中頃には、鳥羽山旧道（切り通し）、さらに鳥羽山洞門を通る道筋になった。その後、明治の終わり頃に天竜橋ができ、渡船は廃止された。

昭和になると、現在の鹿島橋そして新鳥羽山トンネルができた。



北鹿島側の渡船場跡



神社の御旅所



天浜線トンネルの脇



田代家の裏の道



遊歩道の東は竹藪

御旅所より天浜線路のため南のガードに迂回（絶対に線路を横断しない）し、トンネルの脇から右手に登り、田代家の裏を通る。遊歩道と交差するが、その東は竹藪や崩れで通行不能であり、切り通しには行けない。

迂回は、遊歩道を登り、鳥羽山公園への道に出て、右手に下っていく。少し下った道の途中から崖を少し登ると切り通しがあるが、やや危険なので注意。



1 鳥羽山旧道（切り通し）

明治13年に二俣村が鳥羽山峠の道を修理した。その後、二俣村と鹿島村が共同で開削して、38間（約68m）の切り通しの水平道を作り、明治18年に車馬も通れる総延長516m余の山道が竣工した。現在切り通しには倒木があり、土砂が崩れ堆積している。また、切り通し付近で昭和15年に鉱物を試掘したという穴の跡が残されている。



2 鳥羽山洞門

まだ勾配がきつく、道も狭かったりして交通の不便が免れず、明治31年、隧道の掘削に踏み切り、翌32年9月に竣工した。全長135m、幅員3.6m。竣工式には、振舞酒を出したり、祝賀会や町中馬車を走らせたり投げ餅をしたりしたという。

昭和時代に入ると、自動車などの出現に対応できなくなり、昭和17年洞門の西に新鳥羽山トンネルが開通した。旧洞門は太平洋戦争激化により本土決戦に備えた戦車壕に転用されたこともあった。



明治44年10月、現在の鹿島橋の上流側に天竜橋が竣工した。木鉄混合の吊り橋（写真一番右）。全長225m、幅3m。初めのうちは賃取り橋で、大正15年静岡県に移管され、無賃となった。昭和に入ると、自動車の重量に耐えられず橋幅も狭く人車とも危険ということで、昭和12年8月、鹿島橋が竣工した。



3 後間屋田代家

田代家は鹿島五か村の草分けで、江戸時代に北鹿島村の名主と渡船場船越頭を勤める一方、天竜川筏の受け継ぎ問屋も経営していた旧家である。鹿島拾分一番所の役人や請負人になったこともある。天正8年、家康の遠州経略に協力した功があり、筏川下げと諸役免除の特権を与えられた。母屋は安政6年（1859）の再建。土蔵は安政元年以前の築造と伝わる。（土・日・休日のみ開館）



4・5 鳥羽山城・二俣城 (市指定史跡)

戦国時代の二俣は、交通の要衝として軍事・経済の両面から重要視された。二俣川は、鳥羽山に突き当たって西に向きを変え、川口で天竜川に合流していた。鳥羽山城と二俣城は二俣川を隔て、わずか500m程の距離である。



鳥羽山城南虎口



二俣城天守台

永禄11年(1568)遠江侵攻で徳川家康が鳥羽山城や二俣城を領有したが、元亀3年(1572)武田信玄との戦いで二俣城を奪われた。武田軍は天竜川上流から筏を流し井戸櫓を破壊、水の手を絶ったと言われている。

しかし、天正3年(1575)長篠の戦いに勝利し、すぐに鳥羽山城を本陣として二俣城を攻撃し奪回した。

天正18年(1590)家康が関東に移封されると、豊臣配下の浜松城主堀尾吉晴の弟宗光が二俣城に入城し、城を大改修、野面積みの石垣や天守台のある城郭を築いた。鳥羽山城でも本丸東側の石垣が目立つ。本丸は土塁が巡り、周りに幾つかの曲輪が配置されている。西側土塁内側には建物跡や井戸跡があり、庭園遺構も残されている。二俣城と別郭一城の城として機能した。

石垣の石材は浜名湖北辺周辺部で調達され、

浜名湖を利用し、二俣・鳥羽山へと運搬されたと考えられる。

関ヶ原戦後は再び徳川領となったが、すでに城として果たすべき役割がなくなり、まもなく廃城となった。



線路を越えて右折

治療院の看板

秋葉街道は鳥羽山を下り、天浜線の踏切を越え、右折して北東へ向かう。浅井治療院の看板の向かいにある川合家の横の細道に入ると、角に大きな道標がある。

6 道標

この道標は鳳来寺道と秋葉街道との分岐点に、幕末か明治初年に建てられたと思われる。表面は「右 鳳来寺 左 濱まつ」右下に「宿屋連中」左下に「世話人 大阪屋平兵衛 米山源次郎」、裏面は「右 秋葉 五里 光明 二り」と刻まれている。向きは実際と異なっている。



7 袴田喜長と掘割

二俣村は、四方を山に囲まれて水はけが悪く、少しの雨でも二俣川が氾濫し、田畑ばかりでなく人家まで水浸しになること度々であった。明和3年(1766)、同村の名主であった袴田甚右衛門(喜長)は、鳥羽山を掘り割って二俣川の水を真っ直ぐ天竜川へ流すため、多額の私財を投じ村人を陣頭指揮して工事を進めた。その後、二俣川の付け替え工事と締め切り堤の工事も、費用を自分で支弁し、寛政3年(1791)工事が完成した。これにより村は水害に遭わなくなっただけでなく、新たに3863坪の新田を獲得することができたため、村民に分け与えることにした。喜長は村の恩人として慕われ、南口に頌徳碑が建てられている。





二俣本町にある道標（6）を過ぎ、二俣本町駅の西辺りからやや道が細く古い面影が残る街道となる。国道を越えて進むと、大明神を右折する辺りも古い商店や風呂屋、旅館などの建物が残っている。東西・南北交通の交差点であった二俣町は大正から昭和にかけて繭の集積地として栄えた。



古い町並み



国道を越えてまっすぐ



大明神



煉瓦造りの土蔵



風呂屋（解体済）



かどや旅館を左折し
クローバー通りを北へ



8 毘沙門堂

栄林寺の一堂子で、本尊の毘沙門天王は行基の作品と伝えられ、文禄12年（1595）に信者の寄進で建設されたと言われる。享保元年（1716）再建され、最近までであった。この一帯は二俣城をめぐる徳川軍と武田軍が戦った際、本田忠勝の陣城が置かれた場所と言われ、栄林寺裏山などに堀切や曲輪跡が残っている。



山門



井戸橋

9 清瀧寺と信康廟

清瀧寺は浄土宗増上寺の末寺で、山号は信康山という。応永13年（1406）僧長安房が境内の三ノ滝の傍らに草庵を結び念仏修行をしたのが始まりという。



信康廟

岡崎三郎信康は、徳川家康が人質時代に築山御前（今川一族の関口氏の出）との間に生まれた。家康が桶狭間の戦い後、織田信長と結んだことにより、不和になった築山御前が武田と通じたことが発覚し、家康の家来に佐鳴湖畔で殺され、信康も二俣城で自刃を命ぜられた。21歳であった。首は信長の許に送られたが、胴体は火葬後清瀧寺境内に埋葬された。その後清瀧寺は家康から信康の菩提寺に指定された。

10 旧二俣町役場（国有形文化財）



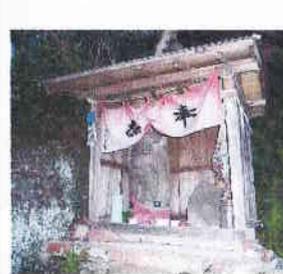
昭和11年に二俣町の庁舎として建設され、天竜市役所となり、庁舎移転後は公民館、図書館、市史編纂室として使われてきた。木造2階建てで日本瓦葺き寄せ棟造り、外壁はスクラッチタイル張り、正面中央にポーチを構えるユニークな外観である。設計者は地元の大工・本島亥三郎。現在「本田宗一郎ものづくり伝承館」として活用されている。

二俣町には、その他にも洋風建築の二俣医院や現存する唯一の木造3階建ての陣屋旅館など、栄えていた時代の象徴となる建物が残っている。



土蔵造りの酒屋

13 横町通り
秋葉街道は、クローバー通りから現金屋の角を左折し、風情のある路地空間の横町通りに入る。醤油屋や土蔵造りの酒屋などの昔からの商家が並んでいる。



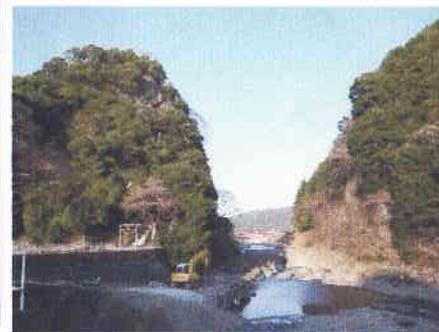
14 延命地蔵

横町から皆原へ登る道際に2体の地蔵が祀られている。伝説によると、日照り続きで二俣川の水が涸れ、飲み水に困ったため井戸を掘ってもらったところ、

2体の地蔵が出てきたのでさっそく井戸の傍らに祠をつくって祀った。その後井戸から清水がわき出て一度も涸れることがなかった。道路拡張のためこの地へ移し、毎年7月24日の盂蘭盆の日に供養を営んできた。割れた一体には「夫以宝永四丁亥天(1707)七月 於盂蘭盆……」の銘文、もう一体の台座には「おるい おます ……」など9人の女性名が刻まれている。

15 烏帽子山・二光の滝

二俣川の下流右岸にある標高60m程の岩山で、西方から眺めた姿が烏帽子に似ていることで命名され、昔から俳句や和歌の歌枕となっている。かつては烏帽子山と南の浅間山は地続きの小山であったが、二俣川が大きく蛇行して水が出ると家屋や田畑に大きな被害をもたらしていた。昭和10年2つの山の間を掘り割って二俣川を真っ直ぐに付け替えた。それにより、落差ができ、二俣町と光明村の一字ずつを取り、二光の滝と名付けた。滝の上には小祠があり、小角役行者(神変菩薩)像が祀られている。



11 二俣蕨市場

明治の中頃から大正の初め頃に、仲町に2軒の蕨問屋が開かれた。大正中期になると、北は浦川方面、東南は小笠・磐周三郡下、西は湖西方面の広い範囲にわたって大量の蕨が出荷され、仲町・諏訪町一带は大きな籠に蕨を積んだ荷車でごった返した。昭和2年に合併して二俣蕨市場となり、取り扱い高は一市場としては全国一であった。全国から集まる人々で遊郭・芝居小屋・料理屋・旅館などが大繁盛した。しかし世界恐慌や戦争の時代になり、養蚕農家が減少して蕨取引も下降線をたどり、昭和17年火災に遭い、閉鎖された。現在は一産山本園の南隣で駐車場になっている。



12 ヤマタケの蔵

クローバー通り(秋葉街道)に面した町屋の敷地は、間口が狭く、奥行きが深い。表から店・居住スペース・中庭・蔵と続き、蔵は一番奥に造られ、裏の路地には多くの蔵が残されている。

ヤマタケの蔵は、内山家に残されていた。大正12年竣工。3棟の内、中央の蔵は木造の骨組みで基礎と外壁は煉瓦積みである。1・2階とも畳敷きの座敷蔵で、木材商の蔵らしく内部は梁や柱に吟味された材が使われ、丁寧に造り込まれている。



16 秋葉神社

安永7年(1778)二俣村車道の山本喜太夫が日頃信仰している秋葉大権現を秋葉山から勧進して屋敷裏山に祀ったのに始まるという。たまたま翌年の春、二俣村の大火の際、喜太夫の家だけが災禍を免れ、村中の人々が秋葉の神の靈験に驚き、同社の祭祀に参加するようになったので、

現在は車道地区の鎮守となっている。境内に「奉献地藏大菩薩」「文政八酉年(1825)七月」銘の石灯籠がある。現在、もとの山は全て削られ宅地化している。

17 陸軍中野学校二俣分校跡

現在の天竜区役所南館と市天竜保健福祉センターの位置に、明治42年から陸軍の工兵隊廠舎があり、天竜川での架橋訓練の際の宿舎として利用された。太平洋戦争の戦局が悪化すると、昭和19年、陸軍中野学校の分校として転用され、諜報・謀略・遊撃戦の要員を養成する軍学校となった。

昭和47年フィリピンのルバング島から帰還した小野田寛郎元少尉も分校の第一期生であった。



18 役の行者

北遠地方は江戸時代に大峰系の修験道が盛んであったらしく、各地に役の行者の石像が見られる。笹岡長光寺の西の山に祀られている石像は、台座に「文政九年(1826)十二月吉日講中」と刻まれ、同所の大峰講中の人々によって寄進されたものである。



19 笹岡古城址

現在本城山から天竜区役所の庁舎が建っている一帯にあった

城館で、内山真龍の「遠江国風土記伝」には、二俣古城として記されている。二俣の三城の中で最も古い時代に築かれた城と考えられ、今川時代の末頃まで使用された居館的性格の城と思われる。戦国時代後半には防御しやすい二俣城へ城機能が移った。天竜市役所建設のため、城は大半が破壊されてしまったが、発掘調査により平安時代から戦国時代にかけての古銭・陶磁器・土塁・空堀・建物跡・井戸跡などが発見されている。



20 内山真龍資料館

元文5年(1740)大谷村の名主の長男として生まれ、21歳で名主を継いだ。23歳の時、賀茂真淵に入門し国学を修めるため和歌を詠み、万葉集や古事記を学んだ。真龍は生涯で多くの書を著した。寛政元年(1789)から十余年の歳月をかけて、遠江国の

歴史・地理の研究をすすめ「遠江国風土記伝」を著している。遠江13郡各一巻として、地図・山川・古跡・石高・伝説を記した13巻からなる。大名からも写本の依頼が多くあり、為政者にも重要な資料であったと思われる(1巻から7巻、9巻は県指定文化財)。日本書紀を注解した「日本紀類聚解」は天皇に献上されている。

資料館入口には、内山家の長屋門が保存されている。(市指定文化財)



長屋門



秋葉街道は、^{くるまどう}車道から区役所前の信号を東に折れ、国道と合流して北東の追分の三叉路（山東交差点）に向かう。追分少し手前で右に折れ一端細い道に入る。すぐに左に折れ北へ向かって細い川を越えるが、住宅で道は現存しない。川を越えて国道と合流する。そして追分を右に進むと光明山方面である。



右の細い道へ



先の2軒の辺りで左へ



追分（山東交差点）



21 道標

明治16年に山東村の竹内八三郎ら有志が、追分の三叉路に建てた道標である。表側に「右 光明山 秋葉山 左 秋葉裏坂 信州善光寺 発起人 片桐平次郎 佐々木 惣三郎（以下略） 世話人 高岡茂平 松井忠蔵」、裏側に「明治十六年 竹内八三郎」と刻んでいる。道路拡張の際、西台寺に移されたが、後年竹内喜代次氏が関係者として譲り受け、屋敷に移し替えた。



22 光明山古墳

山東の光明寺の南側、二俣川が形成した沖積平野を見渡せる位置にある。市内最大の前方後円墳で、全長88.4m、後円部直径46m、後円部の高さ7.5m、前方部幅53.7m、前方部の高さ8mである。未発掘で、墳丘では葺石と埴輪が確認されている。古墳時代中期5世紀後半と推定される。県指定史跡。



23 光明寺

昭和6年4月、光明山（鏡山）の光明寺は全山焼失したため、昭和10年に現在地に移転し諸堂を再建した。道標や常夜灯、石仏など大半現在地に移された。三満虚空蔵や笠峰坊大権現（水の神）、大黒天に対する尊崇を集めている。参道の入口横の大きな道標は、もと長沢の光明山登

山口に建てられ、さらに峯小屋峠に移して建てられていたもので、正面に「従是光明山道」、左面に「文化八年未歳三月吉日（1811）、基壇に「江戸 浅草講中 願主 穀屋甚平衛 佐野屋四郎兵衛（他2名）石工 又右衛門」とある。また参道石段脇の文久3年（1863）に寄進された一对の常夜灯は、「天下泰平」「五穀成就」「尾州キヨス本町 柴山藤蔵」と刻まれている。笠部の焼痕が当時を物語る。

24 道標銘

西台寺の薬師堂の前にある双体供養仏（道祖神か）の道標銘（供養等のための石仏・石塔類に、道案内の銘文を併記した石造物）で、かつて追分の三叉路に建っていたものという。北遠地方では最古のものである。銘文は「従是右 加うみやう あきはみち 左 志なの せん加うしみち」「于今貞享四（1687）丁卯年七月吉日」と刻む。



北側が秋葉街道部分



コンビニの東の細道へ

追分を右に進み、西台寺前の道路が北側に広がっている部分が秋葉街道である。そこから先のコンビニエンスストア東の細道に入って少し進み、左折して再び国道に出る。



二俣川に沿ってしばらく進むと、市川氏宅沿いの左手斜めの細い道に入る。勤労青少年ホームの角を右折し、再び国道に出る。左手の光明幼稚園の前に、本田宗一郎の出身校である山東尋常小学校跡の門が見える。



斜め左の細い道へ



ホーム前を右折



再び国道に出る



山東尋常小学校跡



秋葉街道は相生橋より手前で斜め右に進み、二俣川を越える。

相生橋の右手にある向こう岸の道を進み、左折すると、国道に出る。この角右手に以前は秋葉山常夜灯があったが、道路拡張のため撤去されたという。



向こう岸の道へ



左折して



国道へ

国道を進み、左手の中道橋を渡る。そのまま細い道を直進する。ここから昔ながらの面影の残る街道である。街道は蔵の裏で右折し左折するが、現在は真っ直ぐ進んでいる。以前、蔵のある家では、裏で店を開いていたという。



中道橋へ



真っ直ぐ細い道へ



蔵のある家



左右が畑に



○ 馬頭観音

左右が畑になっている街道の左脇に、文字だけの馬頭観音が建てられている。「馬頭観音等？ 文政十三年（1830）寅十一月 日」と刻まれている。街道を通った馬が亡くなり供養したものという。



二俣川に突き当たる。秋葉街道は川を越え、北に進んでいる。

迂回路は中道橋まで戻り、国道を進み、二俣川に沿って向こう岸まで行く。



○道標

山東の中道橋のたもとに、平成28年9月に再建された道標である。正面に「右 光明山 秋葉山道」（建立年号はなし）と刻まれている。

左の中道橋を渡る道が旧秋葉道である。右は現在は国道362号であるが、明治13年に二俣川沿いに栗田輝永によって二俣から犬居への道が開かれ、その後明治39年までに整備されて県道となった。

昭和6年に光明寺が火災で焼失し、昭和10年に山東に再建されているので、この道標は、明治末から昭和の初めの間に県道を通る道筋を示すものとして建てられたと思われる。

そして20年程前までここに建てられていたが、国道の道路拡張によって撤去され、近くの住民の庭に保管されていた。



秋葉街道は①の二俣川を渡ってから北へ進み、②、③の二俣川を渡る。
②、③とも現在は橋がないので迂回路を通り、25へ至る。



①二俣川を渡って北へ



②二俣川，対岸工場



工場の北側から北へ



③二俣川，対岸鈴木家



25 秋葉街道残存部
鈴木俊彦宅の西側に街道が昔のまま残っていて、北へ向かっている。鈴木氏は子供の頃改修前の二俣川の板橋をよく渡っていたという。

鈴木家の北側の工場をぬけ、二俣川に沿って進み五森橋手前で二俣川を渡る。



26 地藏菩薩・光明搗栗

青島良一家に「宝永五戊子天（1708）九月廿七日」建立の地藏菩薩がある。亡くなった旅人を供養するためという。

徳川家康が光明山で武田勢と戦った折、山東村の平太夫（後に青島の苗字と帯刀御免）と只来村の者が百姓たちを引き連れ加勢した。勝ち戦となり、産物の搗栗を献上したところ、「高名（功名）勝栗」として毎年献上することになり、代わりに両村は諸役御免となった。暫くは江戸まで持参し献上していたが、後に中泉代官所に納めるようになった。献上御栗林は山東村だけでも一町八反余もあった。

徳川家康が光明山で武田勢と戦った折、山東村の平太夫（後に青島の苗字と帯刀御免）と只来村の者が百姓たちを引き連れ加勢した。勝ち戦となり、産物の搗栗を献上したところ、「高名（功名）勝栗」として毎年献上することになり、代わりに両村は諸役御免となった。暫くは江戸まで持参し献上していたが、後に中泉代官所に納めるようになった。献上御栗林は山東村だけでも一町八反余もあった。



27 道標（庚申塔）

五森橋の北側に2基の庚申塔がある。どちらにも「秋葉山」「光明山」の刻銘があるという。左のものは判読できるが、右のものは判然としない。右側のものは右上部を一部破損し、左のものは下部を完全に欠いて上部のみが据えられている。もと道の西側にあったという。



左は以前の麓橋跡



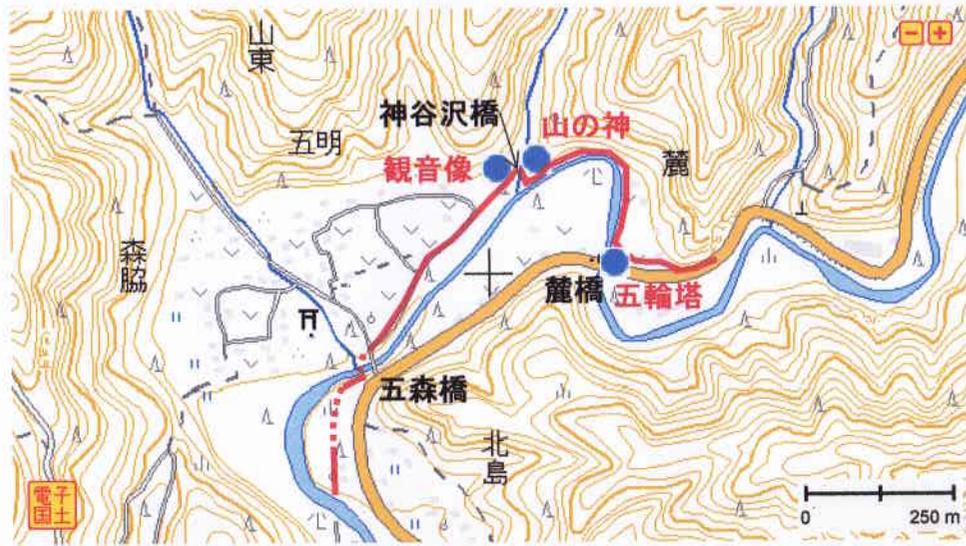
麓橋から左の道へ

庚申塔から再び二俣川を渡り国道へ戻って進むと麓橋に至る。すぐ横に以前の麓橋跡があり、その先の左の細道を進んで、国道へ出る。



28 精進淵

「秋葉山参詣道法図」では、「二俣一庄司フチ 此間四十八瀬ト云 十三セワタリ 川冬ハ細キハシアリ」と記されている。二俣川は「四十八瀬川」と言われ、多くの瀬があった。精進淵は光明山への登山口にあたり、茶屋があったという。光明山への参詣人がここで行水精進するので、この名があるという。



p8 <五森橋から麓橋の旧道 追加>



五森橋から麓橋の間は、明治時代になって新道が作られる前は、北側の山沿いを回る光明詣での旧道があったという。

五森橋の傍らにある道標を兼ねた庚申塔の前から二俣川に沿って進むと、林の中に一体の観音像が祀られている。観音像の光背には「右 光明山 秋葉山」と刻まれ、光明山・秋葉山参詣の道標になっている。

神谷沢橋を渡って右に折れ、二俣川沿いに回ると山の神が祀られている。付近の人は「山の講と言って、昔は2月7日と11月7日に、付近の山持ちの人がみんなで山の神にお参りをしていた。」という。

山の神の先の道はしばらく、狭く崩れやすいので注意が必要である。

麓橋横の五輪塔は、由来は伝わっていないが、只来の「なこ山」の裾野にあったものを村人が現在の場所に移し変えたという。



山の神



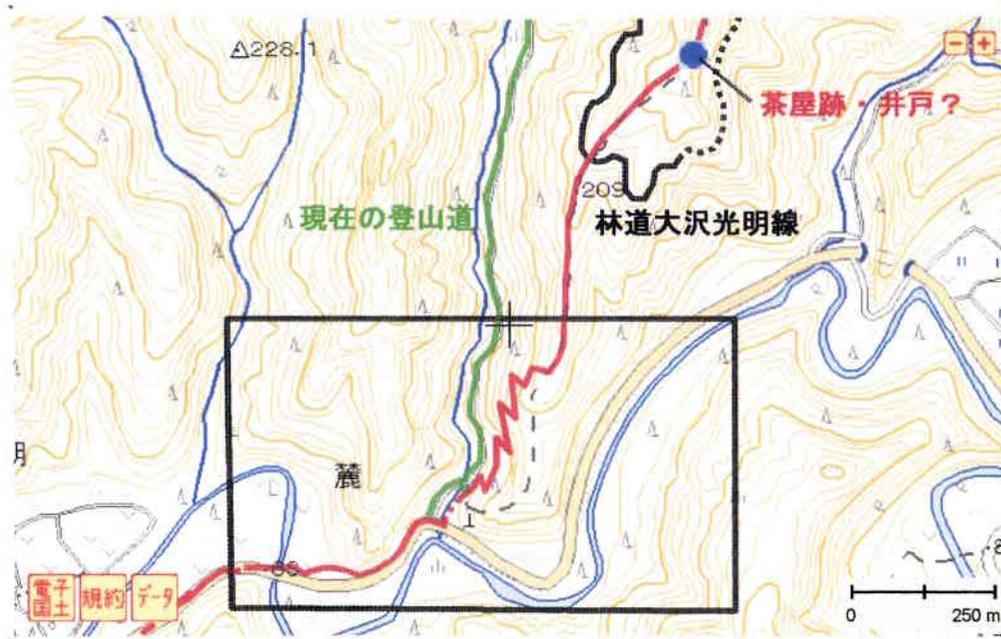
崩れやすい道 (右下は二俣川)



麓橋の五輪塔



(下の地図の黒枠を拡大した地図)



<注意>秋葉街道は尾根づたいの登山道であるが、迂回路として現在の登山口からそのまま林道光明線に出る谷つたいの登山道がある。

秋葉街道は、精進淵より光明山へ至る50町の登山道となる。2軒の家の間にある沢の右手を入っていくが、通行不能なので、左手の現在の登山道入口へ迂回し、橋を渡ってすぐ右手の林の道を進む。小さな堂の所から鋭角に左折して、山を登り始める。



旧登山口



迂回は現在の登山口から



右手の林へ



29 観音像・鳥居跡

登山口の堂に観音像らしき石仏が建てられている。「文化四年(1807)卯四月日」「真法禅門 施主 寛道」と刻まれている。登山口の左右に鳥居跡と思われる石組みの台座があり、堂は片方の台座の上に建てられている。



30・31 町石 (第二町・第六町)

精進淵から光明山に至る登山道に一町ごとに建てられた町石の一部である。この登山道にはわずかしこ残されていない。第二町の町石には、「第二町」「當國龜玉郡新原村兼子口」「寶曆六丙子年九月吉口」(1756)と刻まれ、第六町の町石には、「第六町」「當國豊田郡下山梨村 成道寺」「寶曆八戊寅年十一月」(1758)と刻まれている。第六町の町石は横倒しになり、半分ずつに割れている。また、二つの町石の間に、3町と5町の町石のものと思われる台座の石が放置されている。





(前ページの地図) 尾根づたいの道を進むと、新しい林道大沢光明線が横切っている。見晴らしがよく、アクトタワーも見える場所である。林道から仮設の階段を上がり、尾根への道ははっきりしないので探しながら進む。やや危険な急坂もあり、回り道をして尾根に上がる。



新しい林道に出る



仮設の階段から尾根へ



茶屋跡か



井戸跡か

林道大沢光明線を越えて尾根づたいに進むと、左手に石垣のある平地があり、茶屋跡ではないかと思われる。道の右手に、井戸跡と思われる窪地もある。



右上尾根だが急坂のため左へ



尾根に上がる途中、特別天然記念物ニホンカモシカに遭遇。



尾根の道を進むと、右側に町石のものと思われる石の台座がある。そのまま左手を進む。



32 町石 (第三十五町)
「第三十五町」「宝暦四甲戌年(1754)九月」「當國周智郡久保田村 本多七郎右衛門」の刻銘がある。横倒しで上部を一部破損している。

町石を過ぎた後、しばらく進むと、道の左右に石組みの台座が設置されている。登山口に設置されたものと同様なものである。鳥居跡と思われる。





街道は、林道光明線に出て右に進む。すぐに光明山遺跡への旧道②（やや新しく整備されている）があるが、旧道①（江戸時代の古い道）は、林道をそのままさらに50m程進んだ所のカーブの手前から右の山を巡るように登っていく。途中まであまり整備されていない道である。



林道光明線に出て右折



林道から②の旧道



林道から①の旧道



林道沿いに進む

①を登る途中に町石台座がある。そして再び林道光明線に合流する。しかし林道に出ず、林道に沿って山側を進むと、第四十五町石に至る。



33 町石 (第四十五町)

「第四十五町」「宝曆五（1755）乙亥年五月」「三州渥美郡曾(畠?)村大野屋市左衛門 為榮嶽浄繁信士立之」と刻銘されている。林道からも見ることができる。

街道は、この町石から山側を登り、四十七町石に至る。



34 町石 (第四十七町)

「第四十七町」「明和四（1767）丁亥年十一月吉日」「當國豊田郡中野町村 村越與平次」と刻銘されている。



35 町石 (第五十町)

「第五十町」「于時寛保二（1742）壬戌八月口」「願主 當國犬居村小澤幸八郎」と刻銘されている。駐車場の手前にあり、精進淵より光明山までに建てられた町石の最後のものである。

光明山遺跡までの街道近くには、「延命水」と呼ばれる湧水や②の街道の途中に「奉納 国家安全」と刻まれた石碑（大正12年2月 遠州二俣町車道 市川由太郎が建立）の前の湧水がある。

また、791年坂上田村麻呂の侍従、^{なつかのまゆみ}楯部真躬が当地方の治安維持の任にあたったが、死去し、この地に葬られたとする「方神塚」がある。



湧水(延命水)



②の湧水



方神塚



堀切

天正3年(1576)徳川軍による二俣城奪還、光明城攻めが行われて落城し、徳川家臣で二俣城主の大久保忠世の支配下に置かれた。天正10年(1582)頃に廃城になった。光明寺本堂が建っていた場所が本曲輪と考えられ、周辺に中曲輪、堀切などが残っている。この光明城攻めで5人の旗頭が命を落とし葬られたという「五人塚」の説明板がある。再び光明寺がこの地に戻り、城跡に本堂や石垣などを築いたのは慶長年間(1596~1614)の頃で、徳川の祈願所として発展した。

光明寺跡から奥の院への道を進み、林道光明線に出て30m程進むと、^②右手に光明山・奥の院に寄らず峰小屋峠へ向かう道がある。林道をさらに50m程進むと、「←奥の院跡」の標示がある道があるので、こちらへ向かう。^①



36 光明山遺跡(光明寺跡・光明城跡)

光明山頂から南西700m、標高489mの付近が光明寺跡である。寺伝によれば、養老元年(717)行基により開創された。近世の文献によれば、本尊は虚空蔵菩薩、守護神が笠鋒坊大権現であった。光明山は秋葉山とよく似た信仰形態をもち、修験道の影響を強く受けている。近世には、秋葉を火の神、光明を水の神として両方へ参拝してこそ靈験があるという信仰が生まれた。寛政10年(1798)に著された「遠山奇談」には、「頂上には光明山大権現の社を崇たり。立ち並ぶ殿造魏々としてめざましきこといはんかたなく、虚空蔵を本地堂とし、門外にはかけづくりして茶店などの家ありしが、都の清水にいとよくにたり」とある。



昭和6年、堂塔伽藍一宇も残さず焼失したため、山東の現光明寺へ移転した。石仏・常夜灯などの多くも移転した。今は石垣や石段、寛政9年建立の一对の常夜灯などが残され、その他の石材が散乱している。裏手に「古井戸」がある。

光明城は、光明寺跡地に所在した城で、戦国時代の初期に今川氏家臣が山城に改築したとされる。築城に際しては、それまであった光明寺を接收し、現在の光明寺の地へ移転させた。その後、武田氏の城として重要な役割を果たすが、



林道光明線に出る



② 峰小屋峠へ向かう道



① 奥の院への道



36 光明山遺跡 追加 (地図参照)

光明山遺跡駐車場から遺跡に至る道の左手の山中に光明寺住職の墓が残されている。最大の「二十二世塔」は桜井梅綻住職(明治7年没)のものである。

37 道標残欠

奥の院への道へ数m入った左手に、道標と思われる残欠がある。下部に「町」の文字のみが残っているが、上部は見つからず、刻まれた内容は不明である。





38 奥の院跡

奥の院は摩利支天が祀られ、戦勝祈願の仏として武将の帰依が厚かったという。現地に 残るものは、二つに割れた手水鉢のみで「清浄水」「安政五戊午歳（1858）八月口日」と記されている。

右手の断崖は「鏡岩」と言われ、光明山信仰の象徴となっていたもので、「昼は樹上に光を放ち、夜は岩が光輝く」と言い伝えられ、遠州の奇石の一つに数えられている。昔、遠州灘を行き交う船は、これを灯台代わりにした



奥の院跡



隠れ岩

ともいう。光明山は別名「鏡山」ともいう。また、南東には武田と戦った家康が隠れたという「隠れ岩」がある。

奥の院から戻ると、街道は光明山より手前で左手にある急坂の階段を下って林道光明線と合流して峯小屋峠方向に向かう。

この急坂をしばらく下り、途中、看板のある所をそのまま右手の坂道へ下ると道標がある。



左の坂の階段へ



急坂が続く



看板 右が道標へ
左は迂回路①林道へ



39 道標

急坂を下ってくる時、右手に自然石の道標がある。下から登ってくる人たちのための道標で、奥の院への道と光明寺への道の分岐点にある。左上が欠けている。

表に「右 奥の院道 鹿の通路といふ」「(左) 光明寺本坊道 雲の梯階坂といふ」「施主 鈴木和吉、中央に「しげみあふ……」の文があり、裏に「明治廿八年六月五日 開扉之晨建立」と刻まれている。

道標を過ぎて街道は尾根づたいに進むが、途中道跡がなくなり、木々が茂っている所がある。迂回路は、戻って先ほどの看板の所のもう一つの坂を下って林道に出る（迂回路①）。または右手の作業道（一部尾根の街道と重なっている）を進み、林道に出る（迂回路②）。

迂回路①



林道へ

迂回路②



左は尾根 右手の作業道へ



そして林道へ



< P 1 2 ・ P 1 3 の追加 >

P 1 2 の②の道より古いと思われる③峰小屋峠に向かう古い道が残っている。
 ①の奥の院への道の入口付近から右手に入り、奥の院方面から東に下る急坂の途中に出る。39道標より150m程上である。明治23年の地図には③の道は記されているが、②の道は記されていないため、③は少なくとも明治前半までは使われ、その後②の道が開かれたと思われる。(39道標は明治28年建立)

この道は途中に崩れが何か所もあり、一般の人には危険な道である。



③の出口を振り返る 右上奥の院へ



奥の院入口付近 右手へ



崩れやすい所何か所も



古い石組み



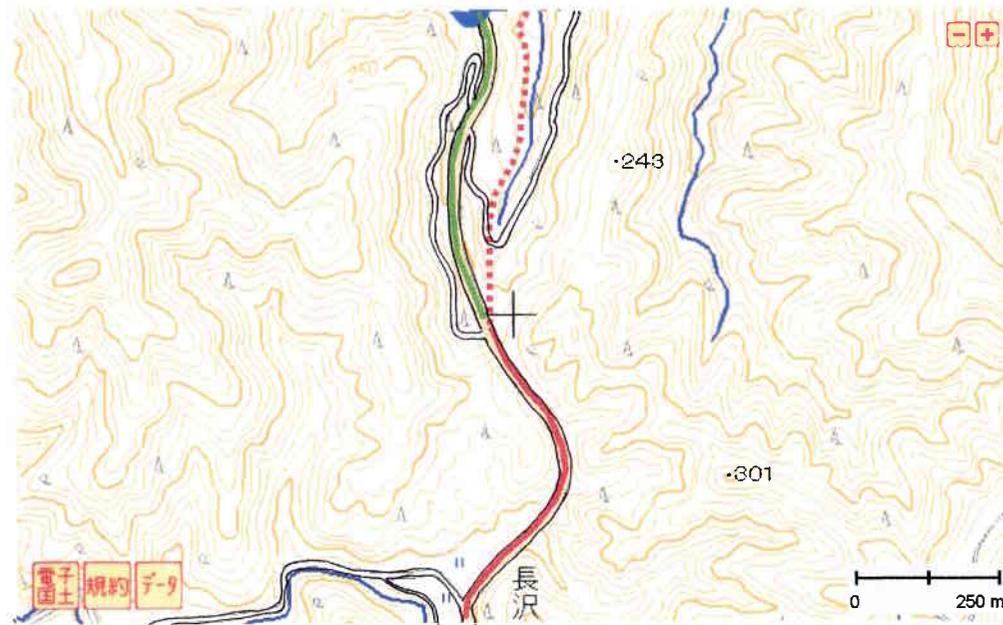
道は崩壊



下に②の道の橋



坂への出口



林道を下って行くと、左斜めに入る明治時代の初め頃まで使われていたと思われる旧道①がある。この付近が江戸時代における「峯小屋」と思われる。これを進むと高台になる手前で右手に長沢へ下る道があったが、今は道跡がはっきりしない。



左斜めが①旧道



①の高台付近

ここを引き返し、迂回路の林道を峯小屋峠方面に下る。



明治の道②へ、右が峯小屋峠



国道に合流

林道を下ると、峯小屋峠のある明治の道②に出る。明治14年以降に開かれた道である。峠には茶屋があり、①の旧道から峠へ通じる道があったという。左手を下り、国道に合流して長沢に向かう。



長沢は「掛川誌稿」によると、坂下・和田之谷とともに秋葉山参詣の宿泊地として繁栄したという。「笹屋」「桜屋」という宿屋が大正末頃まで営業したという。

国道の長沢から和田之谷への坂を下り始める辺りから街道は国道を離れ、右手の谷や沢づたいを進む。しかし、今は草や木が茂り、道は消えてしまっているので、迂回路は国道を進む。





< p 14 旧道①についての追加 >

旧道①の林道に入り、途中から長沢に下りる道は、現在残っているが未整備であり一般の人は注意が必要である。広くて歩きやすい部分があるが、道がくずれたり木の橋が朽ちたりして危険な部分、道が小さな沢のようになっていたり、茂みや小枝の散乱があったりして歩きにくい部分がある。特に下りる初めの部分付近は、くずれがあり、要注意である。最後の出口になる部分は、茶畑となっている。茶畑から先は不通であるので、国道に上がる。



低い所 (右下に道あり)



崩れがある部分



歩きやすい部分



茂みがある部分



朽ちた木の橋



茶畑に出て手前の国道へ



40 秋葉街道残存部

沢沿いに進んできた街道は、迂回路である国道の「街道橋」の下を通り、和田之谷に入る。国道の「和田之谷橋」の手前、左手の川の向こう側に秋葉街道が昔のまま残っている。唐沢氏の家の南から家の前を通っている。さらに北の寮の西側に道があり、川を越えると集落である。



唐沢氏の家の南から



家の前へ



寮の西側の街道



和田之谷の集落は宿泊地として、「花屋」「扇屋」「松屋」「ききょう屋」などの宿屋があり、回り舞台が明治末まであって秋葉山参詣人相手の興行が行われたという。



41 役小角像

集落南東の行者山とよばれる急坂の丘上にある。「犬居和田之谷村 己之助講中」、「宝暦十三癸未六月日」（1763）と刻まれている。上部が補修されている。毎年8月に和田之谷集落で祭礼が行われている。「掛川誌稿」によれば、秋葉山麓には秋葉修験一五カ院があり、修験の活動が盛んな地域であった。



42 秋葉山常夜灯

天王社境内石段脇にある。「秋葉山常夜燈」「文化三丙寅（1806）十一月吉日」「世話人 柴本村口」の刻銘がある。笠の一部を欠いている。





秋葉神社下社の前を通過して気田川沿いに北上すると、坂下の九里橋に至る。ここが秋葉山表参道50町の起点となる

4 3 気田川渡船場

現在の秋葉橋より下流30m程の所に渡船場があり、大正末頃まで渡しであった。江戸時代「和田之谷の渡し」といわれ、「掛川誌稿」には、「和田之谷渡 下嶋と和田谷の間にある気田川の渡しなり。……此所にて気田川を渡り、和田谷、長沢を経て光明山に登り、二俣に下り、加嶋にて天竜川を渡り、浜松に至る。」と記されている。秋葉山への参詣人は、川を渡った地点で水垢離をしたという。

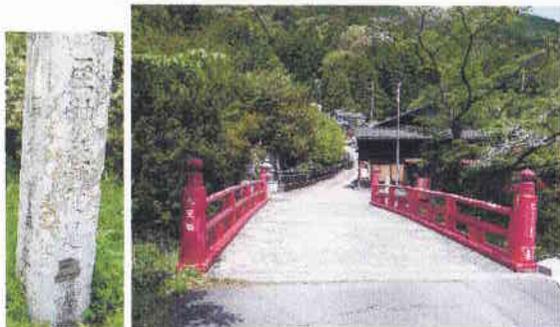


4 4 秋葉神社下社

下社は、昭和18年に秋葉山が隣接する北西麓（現天竜区竜山）の峰之沢鉦山から起こった山火事で類焼したために、本殿が遷座した奉遷



所である。上社に本殿が再建されて以後も、人々の足が絶えることなく、山上の本殿を遙拝する参拝者が訪れる。



45 九里橋

坂下の入口の栃川に架かる九里橋は、掛川・浜松からともに九里目の距離にあたることから名付けられたといわれ、秋葉山坂下口参道50町の起点となった。かつての木橋は昭和16年夏の洪水で流失、現在は同38年竣工した橋になっている。

九里橋のすぐ手前左側に、昭和12年5月に津市岩田秋葉講が建てた「至神社従是三十八丁」の石柱がある。参道途中には他に「……三十丁」「……二十丁」「……十丁」が建てられている。



46 坂下宿

九里橋を渡った所、小さな沢に沿って勾配の急な街道の右側に、旅籠や茶店が並んでいた。「なかや」「椀屋」「高木屋」等の旅籠があった。明治初年には11軒存在したといわれる。「なかや」は平成8年まで営んでいたが、現在は商店になっている。茶店の名物にあんころ餅があった。

47 秋葉山常夜灯

三町目の「高木屋」の向かいに建てられている。竿部表面に「常夜燈」「当國天宮木田仁右衛門」「嘉永五子(1852)二月開帳日」の刻銘がある。この種の常夜灯は笠・火袋・竿(火袋・竿は同一石材)・基礎の四部からなり、嘉永5年のご開帳の時、同一の規格で建立した常夜灯は、坂下口参道で20数基が残っている。笠のないものも多い。(以後の紹介は一部のみにする)



48 町石 (第三町)

町石は、幕末の頃、九里橋から秋葉山頂に至る参道50町の1町ごとに建てられた。竿と基礎の両部からなり、正面に町数のみを刻む同一規格の町石は、第三町・四町・五町・六町・十三町・十四町・十八町・十九町(下部のみ)・

二十町が確認できた。また、頂部が山型になっている八町目付近(判読不明)・十四町・十八町(石仏の裏)の町石は、さらに古いものと思われる。

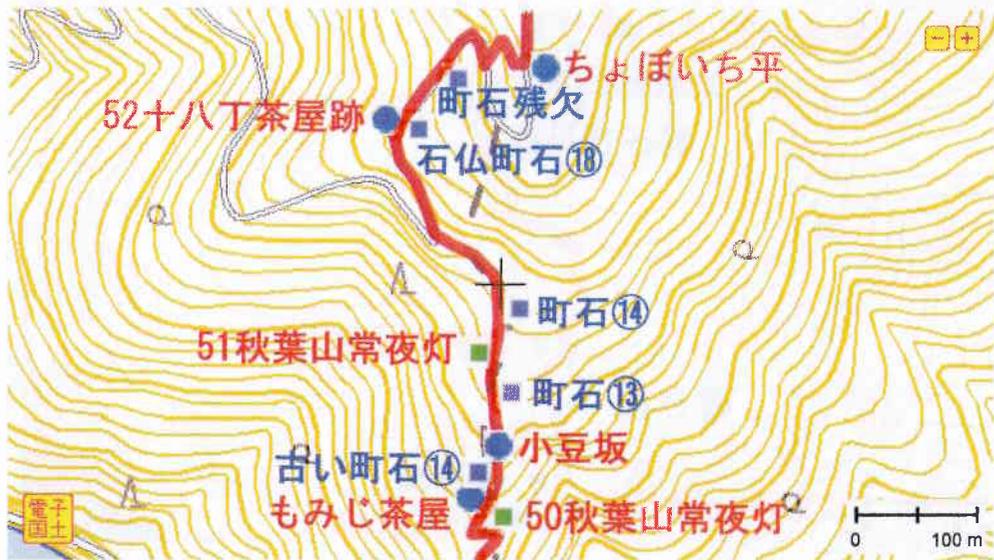
中には、刻まれている町数と現在地との間に位置上のずれがあるものがあり、建立後の移動があったと思われる。

49 三の鳥居跡

五町目の街道に建てられた銅鳥居である。「掛川誌稿」によれば、正徳4(1714)年6月、江州彦根城主によって建てられたもので、額「金明嶺」・裏額「金光明大法輪」が架けられていたという。第二次世界大戦中の金属供出によって銅板がはがされた経緯があり、今は基礎すら残っていない。



また、鳥居跡前に高さ4mに及ぶ大きな秋葉山常夜灯がある。寛政7(1795)年5月「江戸三河町壹丁目講中」によって建てられた。



< p 17の地図 >



六町目町石手前



八町目付近 町石か



十三町目 もみじ屋茶屋跡

(判読不能)

50 秋葉山常夜灯

十三町目のもみじ屋茶屋跡より手前、街道の右側に建てられている常夜灯は、治山治水の社会事業を行った金原明善の父親によって建てられたものである。「常夜燈」「當國安間村 金原久右衛門」「嘉永五壬子(1852)二月開帳日」の刻銘がある。

もみじ茶屋跡のすぐ先に「十四丁」の古い町石がある。(No. 48参照)



十四町目付近は、赤石山脈の名にふさわしく随所に赤い石が見られ、小豆坂と呼ばれる。



51 秋葉山常夜灯

十五町目付近の街道左側に建てられている。竿部正面の「常夜燈」の刻銘は草書体であり、この種の常夜灯の中では唯一のものである。「駿州島田宿川方中」「嘉永五(1852)壬子二月開帳日」の刻銘がある。



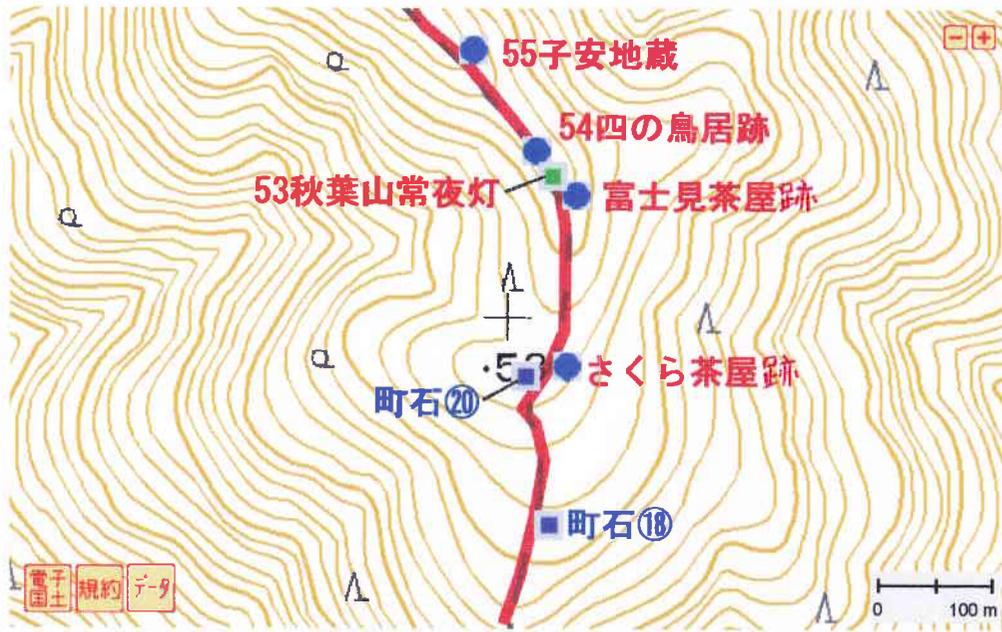
52 十八丁茶屋跡

十八町目付近に茶屋の石垣が街道の左右に残っている。また、茶屋のすぐ先に常夜灯と風化した石仏一体がある。常夜灯は「三州吉田宿魚町講中」が「嘉永五年子二月開帳日」に建てたものである。石仏の裏には「十八丁」と刻まれ、町石を兼ねている古いものである。



十九町目付近に、「ちょぼいち平」と呼ばれる場所がある。毎年12月の秋葉大祭に各地より博徒が集まり、賭博を開いた場所とされている。秋葉参道の各所にあったという。「ちょぼいち」とは、サイコロ賭博の一種である。





さくら茶屋跡



ブランコの桜の木と赤堀さん

二十八町目と三十町目付近の小平地に、「さくら屋」と「富士見屋」の2軒の茶屋があった。この地は晴れた日は遠方に富士山を望むことができたという。三十町目の富士見茶屋は昭和の初め頃まではあったようだが、二十八町目のさくら茶屋はそれ以後も続き、こちらも富士見茶屋とも呼ばれた。現在はさくら屋の流れをくむ内山氏の屋敷や桜の木、畑跡などが残されている。

子供の頃この屋敷に住んでいた赤堀文恵（旧姓内山）さんは、祖父が桜の木にブランコを取り付けてくれ、「富士山に届け」とばかりに漕いで遊んだという。また、片道1時間もかかる中学校へ通う途中、ふかし芋のおやつや小田原提灯を十三町目付近の穴に隠しておいた。授業が終わって母親に頼まれた買い物をし、しょいこを背負い、おやつを食べて、暗くなった足下を提灯で照らしながら山を登り帰ったという。

5 3 秋葉山常夜灯

三十町目の茶屋跡の先で四の鳥居跡の手前、街道の左右に、一対の倒壊した大きな秋葉山常夜灯がある。尾州知多郡の村人たちによって建てられた。「永代常夜燈」「文化三丙寅（1803）歳五月」、基礎部に多数の村名と寄進者が刻まれている。



昭和19年12月の袋井を中心とする地震により倒壊したといわれる。



5 4 四の鳥居跡

三十町目の街道に建てられた銅鳥居で、基礎の部分が残っている。「最勝関」と書かれた縦五尺横二尺七寸の額が掛けられていた。明和2年（1765）8月に秋葉寺住職任超和尚の請に応じた83歳の面山和尚が揮毫した額と伝えられる。

5 5 子安地藏

三十五町目付近に建てられている。幕末の頃、安産祈願の信仰を背景に建てられたものである。新旧2体の石仏があり、旧のものは一つの石材から彫り出されている。光背部に「三十丁」の町数を刻んでいる。祈願をして成就したとき、底を抜いた柄杓を奉納する。祠は昭和18年の大火により焼失したといわれる。





子安地蔵からしばらく進むと、尾根からの眺望が良い場所に出る。気田川の流れが見える。

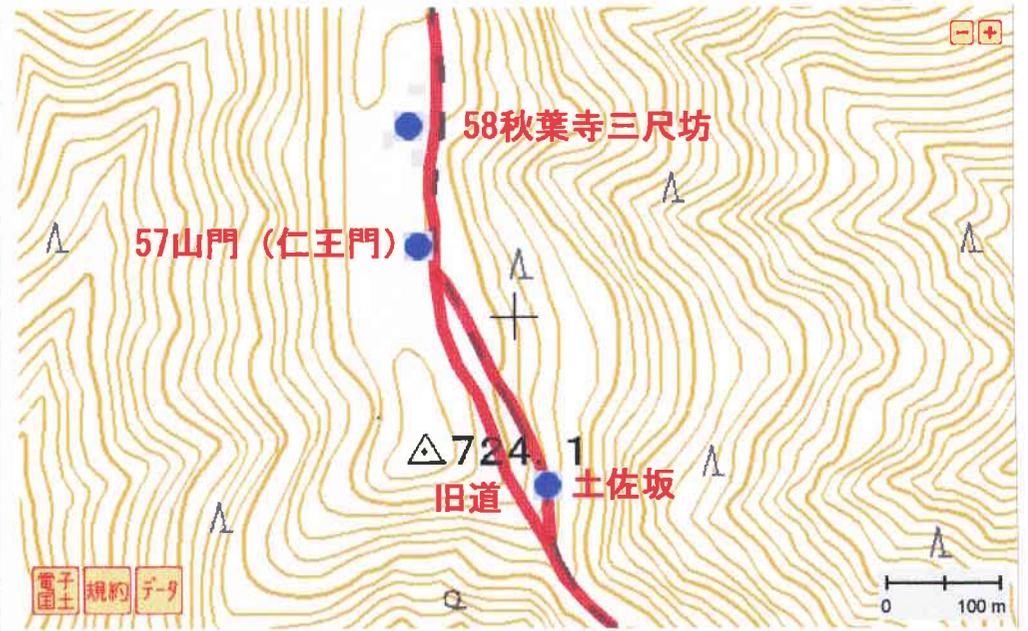


56 信玄岩

三十七町目あたり、戦国時代、秋葉山の山腹に布陣した武田信玄が、気田川を挟んで光明山に陣取る徳川家康に向けて、この岩に足を掛けて強弓を射たという伝説がある。この場所の西南を「権現谷」、東北を「信玄谷」と呼んでいる。



信玄岩より進むと、富士見茶屋の出店跡がある。



解説板によると、写真左側が旧道であるが、土佐の殿様が参拝の折、急坂のため、現在の右側の参道に造り替えたという。そのため「土佐坂」(阿波坂)という。



57 山門(仁王門)

朱塗りの重厚な門である。門の正面に有栖川宮による「秋葉大権現」と揮毫された巨大な扁額は、はじめ浜松宿田町の一の鳥居に掲げられる予定であったが、寺の再興によって、仁王門に掲げられた。

左旧道 右土佐坂

山門前には、嘉永5年2月の御開帳の時に建てられた常夜灯が数基並んでいる。



58 秋葉寺三尺坊

秋葉寺が秋葉山山頂にあった江戸時代中頃、三尺坊大権現の火坊の霊験を中心とした秋葉信仰が全国的に高まり、数多くの参詣者が訪れた。明治5年の神仏分離により廃寺となったが、明治中期に四十五町目の杉平に再興した。堂内には、聖観世音菩薩と秋葉三尺坊大権現が安置されている。12月15・16日に例大祭が行われる。



59 五の鳥居跡

「掛川誌稿」に、四十六町目の銅鳥居は、寛政10年（1798）甲州の人々によって建てられたもので、額「護国嶺」は、秋葉寺第三十九世任梁の筆になるとある。左の基礎の脇に2本の朽ちた木柱が横たわっている。



これより山頂にかけて、樹齢数百年の老杉が立ち並んでいる。



60 秋葉山常夜灯

隨身門前には、「尾州名古屋 衆名屋伊右衛門」「寛政五癸巳（1793）五月吉日」（写真左）、「参州寶飯郡前芝村 願主 山内善左衛門」「寶曆九己卯（1759）十一月十五日」（写真中）、その他寛政六年、明和四年、天明九年、嘉永二年など、

6基の大型の常夜灯が建てられている。また、隨身門の後ろにも文政年間の数基の常夜灯が建てられている。嘉永三年再建されたものもある。

その他、隨身門前左側に、金百両を奉納した記念碑（写真右）が建てられている。「秋葉山 奉納 文金百両」「尾州名護屋押切町 吉村藤七」「寛政乙卯七年（1795）十一月吉日」と刻まれている。

61 隨身門

天保2年（1831）6月、信州上諏訪の大工立川内匠富昌らにより、秋葉寺の仁王門として再建されたもので、明治以降秋葉神社の隨身門として伝えられてきた。「掛川誌稿」に「仁王門 額大登山 裏額秋葉寺 月舟筆」とある。秋葉山は明治以降も火災に遭ったが、本門だけは災禍を免れた。今は「火防秋葉神社」の額が架けられ、二体の隨身像が安置されている。明治初年の廃仏毀釈で仁王像は廃棄され、一体分の頭部のみが秋葉寺に伝えられている。



獅子の上に邪鬼が乗る木組みが珍しい。



62 秋葉神社

神仏分離により明治6年山頂に秋葉神社が造られ、後に秋葉山本宮秋葉神社と改称された。祭神は火之迦具土大神で、火の幸を恵み、悪火を鎮め、火を司る神、火防開運の神として信仰され、毎年12月15・16日に大祭（火まつり）が行われる。昭和18年大火によって秋葉神社は隨身門だけを残して社殿の全てを焼失した。本殿が下社に遷座して後、数年を要して社殿の再建が終わり、昭和61年に遷宮祭が行われた。



秋葉山頂に秋葉寺があった中世の頃、「弓箭刀杖の横難を免れる」霊験が武將の厚い信仰を得て、源頼義、武田信玄、豊臣秀吉、山中鹿之助、加藤清正など、多くの武將により日本刀が奉獻された。現在秋葉神社宝物殿に収蔵され、三振の重要文化財がある。



秋葉山頂北側、信州方面へと通ずる尾根道から西（左手）へ折れ、急坂の階段を少し下った所に「機織井」がある。



63 機織井

小祠の前に石囲いの小井戸があり、傍らに機械化された貯水槽がある。数少ない水源の一つとして古くから重視されてきた。

縁起によると、往古この山に水が無いため、住僧などが観音・守護神に祈願した結果、一夜のうちに清水が湧き出たといわれる。その中に、二つの白玉と背に「秋葉」の二字をいただく一匹の蝦蟆（ひきがえる）が現れ、大登

山霊雲院も秋葉寺に改められたとのこと。

寛永年中（1624～44）、清水の辺りに山姿（山姥）出現して機を織ったので機織井と呼ばれるようになり、大早の時の雨乞いは特に霊験あらたかであったという。

山頂より戸倉へと下る秋葉道から右手の細道を上り進むと、秋葉寺歴代住持の墓がある。途中に住持墓入口を示す倒れた看板がある。



64 秋葉寺歴代住持の墓

25世通峯光達、26世山翁昌春、27世蘆月厳秀の墓は右手に並ぶ。蘆月厳秀の墓石は、1基は破損のため2基目を再建したと思われる。25世通峯光達は、上杉との同盟締結に活躍した24世茂林光幡と共に、徳川家康に重用された。右手の27代までのものと、それ以後の墓の形の相違は、真言密教から曹洞禅へと宗勢が移っていった経緯を物語るといふ。



左より厳秀（破損）・光達・厳秀・昌春